

『九幽經』小攷

——初唐における道教の代表的地獄經典——

砂 山 稔

序 言

碩學澤田瑞穂氏は『地獄變』（増訂版）で道教の「九幽地獄」について次のように述べる。「佛教の地獄は上下無数の層をなして重なりと考えられているが、道教では新趣向として五行の方位に配した九方の地獄を説く、これを九幽地獄という」と。「九幽地獄」は、「地獄」という考えでは佛教に類似しながらも、道教側が獨自色を出したものと指摘されているのであろう。⁽¹⁾唐代にはこの「九幽地獄」を説く代表經典として『九幽經』と略稱される道教經典が誕生した。また、敦煌本の中には『太上九眞妙戒金籙度命九幽

拔罪妙經』（スタイン文書九五七）が殘存し、そこには、風雷・火鬚・金剛・溟冷・普掠・銅柱・屠割・火車・鏝湯の「九幽地獄」の内實が克明に描寫されて、「九幽地獄」の思想が唐代に流行した様子を今に傳えている。小論は、從來から興味は持たれながらも必ずしも充分には考察されて來なかつた『九幽經』に關する全面的な解明を目指したものである。

第一章 『九幽經』と唐宋における流傳

さて、『九幽經』と單に稱する道教經典は、現在の道藏には收録されていないが、唐末五代の碩學道士である杜光庭

は收録されていないが、唐末五代の碩學道士である杜光庭

の『道教靈驗記』卷十二に、「杜簡州九幽拔罪經驗」があり、『九幽拔罪經』の靈驗譚が次のように語られている。

京兆杜武、爲成都右職、清正公直、衆所推仰、因有微恙、請告數日、其家私召巫者看之、巫者曰、有一人少年、偏身有血、云、是杜公之弟、不得其終、死於他所、無人祭祀〔祀〕、常有所恨、故令職位不遷、所爲多滯爾、家人以此事白之、武知其非謬、曰、我弟出外多年、不知存歿、尋常祭饗、未欲與其列位、恐其在耳、今既知之、所說形狀年幾、第行小字、果不虛矣、爲其悲愴久之、復令巫者問之、有何所要、答云、歲月已多、不要更依俗中之禮、但請一道流轉金籙妙戒九幽拔罪經九遍、作符焚之、卽有所詣、不復來矣、我去之後、訟責既無、兄當立遷劇職、作兩任刺史、於是召得道士古嵩華、求此經置道場、轉讀百二十卷、設齋表祝、焚衣服錢帛、既畢、巫者爲達感謝而去、月餘、武遷府城使、尋授簡州刺史、秩滿、復載領簡州、古師因爲寫百餘本九幽經、行於奉道之家、勸其持奉矣。

ここで、杜光庭の『道教靈驗記』が、『九幽拔罪經』を

判然と『九幽經』として注目される。

また、『道教靈驗記』の敘述では、杜武の活躍の時代が不明であるが、南宋の王象之の著作である『輿地紀勝』の成都府路の簡州の條には次のような記事がある。

唐 益州を分け、復た簡州を置く。(割注) 新舊唐志、

武德二年(六一九)に在り、また改めて陽安郡と爲す。

(割注) 天寶元年(七四二)復た簡州と爲す。(割注)

乾元元年(七五八)號して清化軍と爲す。(割注) 圖

經、中和元年(八八二)に在り、杜武を以て軍使と爲

す、唐末王氏その地を有つ。(割注) 通鑑、昭宗大順

元年(八九〇)、簡州の將杜有遷、王建に降る。(卷百四

十五)

簡州は益州を割いて置かれた州で、先の『九幽拔罪經』の靈驗譚も鄴都と縁のある四川のことである點にも注意を拂うべきであるが、『輿地紀勝』のこの記述により杜簡州、卽ち杜武が中和元年頃に活躍した人物であったことも知られるのである。従って、杜武は杜光庭(八五〇—九三三)とほぼ同時代の人で、この時代に『九幽經』が死者救済の經

典として實際に活用されていたことを知るのである。

ところで、敦煌文書の中のスタイン文書九五七は『太上九眞妙戒金籙度命九幽拔罪妙經』の首題を持っている。經題から推してこれが即ち杜光庭の言う『九幽拔罪經』であり、つまりは『九幽經』なのだと考えられる。

そして、既に吉岡義豊氏も指摘されているように敦煌本『太上九眞妙戒金籙度命九幽拔罪妙經』は、現行道藏の『太上九眞妙戒金籙度命拔罪妙經』と合致し、敦煌本は多少の殘缺はありながらも、首題を含め道藏本の前半に相當する部分を今に存している有力なテキストである。⁽²⁾そこで、以下の行論では、敦煌本を参照しつつ道藏本を底本として『九幽經』の引用を行うこととする。

次に、宋初の類書である『太平御覽』には、次のような『九幽經』の引用がある。①「九幽經に曰く、帝尊 三元宮中に在りて、圖籙を惣校す。又曰く、善功 名を黃籙に注し、金格玉簡、三清四極に陳列す」(卷六七六、道部十八、簡章)②「九幽經に曰く、帝尊 九清妙境三元宮中に在りて、三氣の華なる寶雲玉座に御し、圖籙を惣校し、諸苦を

拔濟す」(卷六七七、道部十九、几案)と。

『九幽拔罪經』は、冒頭次のように述べている。

爾の時 元始天尊、九清妙境三元宮中に在り、三蒸の華なる寶雲玉座に御す、(中略)十方來衆(中略)天尊を朝讀す、「天尊は」圖籙を總校して、諸苦を拔度す、時に三元上宮、光明照耀、太空に洞朗し、靈都紫微、十方に輝映す、下 無極境界長夜九幽地獄の中に及び、善惡の命根、光中に煥然たり、一切の玄司、照耀せざるなし、一一の天宮、みな見る、元始天尊、諸の大衆と、至好を敷弘し、人天を開化す、善功を標記し、名を黃籙に注し、金格玉簡、三清に陳列す。(第一紙)

『太平御覽』の二箇條に互る引用は抜粹であり、元始天尊を「帝尊」とし、「四極」の衍字があるが、『九幽拔罪經』の冒頭部分とよく合致するから、『太平御覽』の編纂された宋初においても、杜光庭が活躍した唐末五代と同様に『九幽拔罪經』が『九幽經』として通行していたと見られるのである。先に掲げた冒頭部分だけではなく、『九幽拔罪經』の隨所に「九幽地獄」のことが説かれており、この

經典が『九幽經』と呼ばれるに相應しい内容を備えていることは、以下に縷々論證して行くことにならう。

次に南宋の李昌齡の『太上感應篇傳』(一一七〇年頃成立)では、卷二十六の「違逆上命」の傳において「傳に曰く、いわゆる上とは、君父なり、やや勤敬を失えば、即ち違逆なり、九幽拔罪經の地獄(經)を教化するの説を聞かざるか、九幽經に云う、昔 普掠獄中に、諸の罪人あり、刀山の中を驅け上る、一人あり鋒を踐み刃を履みて、了に苦しむところなし、北帝これを異とす、天尊曰く、此の人 生前、曾て九眞妙戒救苦眞符を受く、吾故に神力を以て覆護す、一は敬讓 父母を孝養す、二は克勤 君主に忠なり、三は不殺 慈もて衆生を救う、四は不淫 身を正し物を處す、五は不盜 義を推し己を損ず、六は嗔りて兇怒もて人を凌がず、七は詐り諂いて善を賊害せず、八は驕傲もて至眞を忽かにせず、九は不二 戒を奉ずること專一にす、此れ道家の説なり」と述べる。ここでは、戒律の一と二が順序が入れ替わっているが、『九幽經』の後述する九眞妙戒の記述を襲っているのである。

また、同じ南宋の蔣叔輿の編である『无上黃籙大齋立成儀』卷二十四の「九獄神燈儀」では、東方風雷地獄主者・南方火鬻地獄主者・西方金剛地獄主者・北方溟冷地獄主者・東北方鑊湯地獄主者・東南方銅柱地獄主者・西南方屠割地獄主者・西北方火車地獄主者・中央普掠地獄主者の九幽地獄主者の名を記載し、また、九幽拔罪天尊の名を掲げた後、「九幽の東、風雷獄という、飛戈飄戟、罪人に衝突す、云々」と述べる。この「飛戈飄戟、罪人に衝突す」は、第三章で述べるように風雷地獄に關する『九幽經』の記述を襲ったものであり、以下やや順序を換えて銅柱・火鬻・屠割・金剛・火車・溟冷・鑊湯・普掠地獄について述べられているところも同様である。また、『无上黃籙大齋立成儀』卷十二などには、『太上靈寶九眞妙戒金籙九幽拔罪妙經』の名が掲げられているが、これが即ち、當面の『九幽經』なのであろう。

それでは、次に、道教重玄派の劉無待と『大獻經』、『九幽經』について考察して行こう。

第二章 三元と九幽

周知のように初唐の僧侶である玄奘の『甄正論』に次のように述べられている。

本際經五卷の如きに至りては、乃ち是れ隋の道士劉進喜造り、道士李仲卿十卷に續成す。並びに佛經を模寫して、罪福を潛偷し、因果を構架して、佛法を參亂す。唐より以來、即ち益州の道士黎興・澧洲の道士方長あり、共に海空經十卷を造る。道士李榮また洗浴經を造りて、以て溫室に對す、道士劉無待また大獻經を造りて、以て孟蘭盆に擬し、並びに九幽經を造りて、將に罪福報應に類せんとす。自餘の大部帙にあらざるは、僞なる者 勝げて計うべからず。(卷下)

この『九幽經』、『大獻經』に關しては、夙に吉岡義豐氏に見解がある。それに依れば、『九幽經』は、則天武后時代には良く知られていた經典で、その内容は『大獻經』に類似すると言われ、その『大獻經』については、『大獻經』と言うのは略稱であり、詳しくは現行道藏に収録される

『太上洞玄靈寶三元玉京玄都大獻經』(道藏本と呼ぶ)、もしくは、スタイン文書三〇六一號の敦煌本『太上洞玄靈寶中元玉京玄都大獻經』とも呼ばれるものである。この中元施食を説く根本經典の原初の姿は、敦煌本であり、道藏本はこれに上元、下元についての説明が若干増添されている。

そして、道藏本では一段ごとに義釋がついているが、それは道經としては珍しく、かつ、その義釋の方法が成玄英の『老子道德經開題序訣義疏』と軌を一にしている。この點から見ると、道藏本は初唐の成玄英の頃の彼と同學派の道士によって作成せられたものと推定し得る、或いは、その人物を劉無待に比擬できるかも知れないとされる。⁽³⁾

以上、吉岡氏の、『九幽經』『大獻經』に關する所論を要約したのであるが、ここで言われる成玄英と同學派と言うのが既に指摘したように道教重玄派であり、かつ疏釋(以下疏釋の部分は『大獻經疏』と呼ぶ)には、

大聖天尊、智 空有に周し、位 寰極を過ぎ、道 大羅を貫く。衆妙の門を闢き、重玄の境を洞る。(『大獻經疏』第一紙)

と重玄の語も見えるのである。また、疏釋の冒頭には、「妙本」の語が登場するが、これもまた成玄英の思想世界の重要概念である。

若し夫れ至人 妙本、萬象の先に出で、大聖 深源、六合の外に超ゆ。(『大獻經疏』第一紙)

更に、この疏釋には、この外にも、明白に成玄英の所説を踏襲する部分がある。それは「經」の字義の解釋を述べ、る次の部分である。

尋三洞眞文、七部玄教、討其題目、僉號曰經、是知經者法教之總名、至人之洪範、經之爲美、其大矣哉、蓋羣品之舟航者也(中略)第一訓由者、言三代天尊、十方衆聖、莫不因由經戒而得成道、故曰由也、第二訓徑者、能開通萬物、導達四生、作學者之津梁、實修真之要徑、故曰徑也、第三訓法者、言能爲旨趣玄妙、所致精微、可以軌則蒼生、楷模衆聖、故曰法也、第四訓常者、言非但妙理深遠、湛寂凝然、抑亦三代法王不刊之術、具斯四義、故得稱經。(『大獻經疏』第五紙)

因みに成玄英の『老子開題』の「釋經」の部分を示

『九幽經』小攷

す。

第二釋經者、尋三洞眞文、七部玄教、討其題目、僉號曰經、是知經者法教之物名、至人之洪範、經之爲義、大矣哉、蓋羣品之舟航者也、(中略)第一訓由者、言三世天尊、十方太上、莫不因由此經而得成道、第二訓徑者、言能開通萬物、導達四生、作學者之津梁、寔修真之要徑、第三訓法者、旨趣玄妙、能所精微、可以軌則蒼生、楷模衆聖也、第四訓常者、言非但理致深遠、湛寂凝然、抑亦萬代百王不刊之術、具斯四義、故稱爲經也。(『老子開題』)

このように『大獻經疏』の「經」の字義の解釋は、多少の文字の出入はあるものの成玄英の『老子開題』の解釋を全く踏襲しているのである。⁽⁴⁾因みに強昱氏の「成玄英李榮著述行年考」によれば、韋述の『兩京新記』には、「垂拱(六八五—六八八)中、道士成玄英あり、言論に長じ、莊⁽⁵⁾(疾)老數部を著わし、時に行われるなり」(卷三)とあるが、劉無待は同じ學派のものとして成玄英の説を忠實に繼承したものであろう。

この劉無待は七〇〇年頃の成立とされる玄疑の『甄正論』に唐代の道士として登場する外には、『舊唐書』『新唐書』に依れば、『同光子』なる著作があったと云う。

同光子八卷 劉無待撰 侯儼注(『舊唐書』卷四十七)

劉無待同光子八卷 侯儼注(『新唐書』卷五十九)

さて、『大獻經』は、道教における最も重要な祭日である三元日における死者の救済を説く經典であり、その間の事情は、『大獻經疏』には、次のように説明されている。

言うところの三元とは、正月十五日を上元と爲す、即ち天官檢勾す、七月十五日を中元と爲す、即ち地官檢勾す、十月十五日を下元と爲す、即ち水官檢勾す。

(第三紙)

大獻とは、此の經 人天を普校し、玄都に倣い學ぶ、大獻の法は、一切の亡靈を拔贖し、願行 該廣なり、

故に大獻という。(第四紙)

『大獻經疏』には、また、「九幽とは、九幽地獄なり」(第二十二紙)の語が見えるが、これは『大獻經疏』と『九幽經』との連絡を示すものであろう。つまり、先の「大獻の法」

によって救済を待っている亡靈は九幽地獄にいたのである。従って、『大獻經』では地獄にいる人を救済する「時」について述べ、『九幽經』は救済されるべき人がいる「場所」を示しており、二つの經典は互いに深い關連を持っているのである。吉岡氏が『九幽經』の内容と『大獻經』と類似すると言われたのはその意味であらう。

因みに『甄正論』に云う「道士劉無待(中略)并びに九幽經を造りて、將に罪福報應に類せんとす」の「罪福報應」に關して言えば、佛教經典である『罪福報應經』に説く五道輪轉の思想や、『九幽經』に説く九幽地獄への沈淪とそこから救済を含む、より幅広い罪福の報應を考えてよいのではなからうか。その點からすれば、『大獻經疏』に「中元は生死の簿を主どり、一切地獄囚徒の罪福の事と風刀の考を録す」(第二十八紙)という表現があることも参考になるのである。

三元と九幽との關連で言えば、『九幽經』の冒頭には、「爾の時 元始天尊、九清妙境三元宮中に在り、三炁の華なる寶雲玉座に御す」(第一紙)とあり、元始天尊が三元宮

に居るとされていることが先ず目を惹こう。これは『九幽經』では「三元」が強く意識されていた證左である。

因みに道藏に収録される『太上慈悲道場滅罪水懺』は、この三元と九幽の關係を體現したような經典で、その卷上には、「毎年三元の日、三元の官屬、三界十方の四司五帝・善惡童子・一切靈官と、金闕元始の御前に上朝し、男女生死の籍・罪福因縁、及び九幽地獄水府の窮魂の姓名業簿を考校す」と述べられ、上卷は上元の日、中卷は中元の日、下卷は下元の日に當てられている。この經典には、また九幽拔罪天尊や海空辨惠天尊の名も見えることが注目されよう。

ところで、『九幽經』では、九幽地獄からの救済のための「九幽大齋」の必要を頻りに説く。

その中に此の一人あるを頼む、生存の時、曾て九幽大齋を立て、金籙白簡九眞妙戒を受持し、名を金格に標し、字を玉清に列す、徳重く功高くして、上界に感通す。(第五紙)

天尊また曰く、若もし國土あり、兵災息まず、疫毒流

行す、是れ其の國主后妃、太子王公、及び兆庶まで、また當に九幽大齋を修設し、おのおの九眞妙戒金籙寶符を受持すれば、兵災靜息し、妖惡自ら屏く、天人稱悦し、國の太平を忻ぶ。(第七紙)

夫妻男女、門人同學、當に亡人の爲に、九幽大齋を立て、名を白簡に書かるべし、九眞妙戒を受くが爲に、黑簿を燒除さる、彼の諸の罪人、時に應じて解脱し、魂は九天に上り、因縁輪轉して、九宮眞人と爲るを得。(第八紙)

國主から庶民まで、ここで説かれる九幽大齋の功德は誠に大なるものがある。

ところで、道教重玄派の孟安排の手になる『道教義樞』では、所謂三籙七品の齋について次のように説いている。

三籙とは、一は、金籙齋、上 天災を消し、帝王を保鎮す、二は、玉籙齋、人民を救度し、福を請い過を謝す、三は、黃籙齋、下 地獄九女の苦を抜く、七品とは、一は、三皇齋、仙を求め國を保つ、二は、自然齋、眞を修め道を學ぶ、三は、上清齋、虚に升り妙に

入る、四は、指教齋、災を讓ひ疾を救う、五は、塗炭齋、過を悔い命を請う、六は、明眞齋、九幽の魂を抜く、七は、三元齋、三官の罪を謝す。(卷二)

この『道教義樞』について、王宗昱氏は、明人葉盛へ成化十年(一四六四)五十五才で没の『菽竹堂書目』に至って初めて著録のあることを言うが、⁽⁷⁾『永樂大典』(一四〇七年完成)の卷二〇三〇九には、「道教義樞三一 道書の義に曰く、三一とは、蓋し希夷の奥頤〔蹟〕、神氣の樞機なり、智用うれば則ち事並びに形あり、會歸すれば則ち趣同じく物なし、此れその致なり、洞神經三寶訣に云う、一〔三〕とは、精神氣なり、云々」と、現行道藏本の卷五「三一義」の全文に當たるものが引用されている。

さて、先の七品の齋の内、その六番目の明眞齋には、九幽の魂の救済が説かれているが、こうした考えは魏晉南北朝時代から勿論存在した。「九幽」の語の早期の例は劉宋の謝莊の「朝臣の爲に雍州刺史袁顛に與うるの書」なる文の「徳 九幽に洞り、功 三曜を貫く」(『全宋文』卷三十五)とされる。そして、同時代の陸修靜の『靈寶五感文』には、

洞玄靈寶の齋として、黃籙齋、明眞齋、三元齋、八節齋等を連ねるが、神塚氏はこれら四つの齋が、九幽の魂を救済するものとしている。⁽⁸⁾また、靈寶經の中には、『洞玄靈寶長夜之府玉匣九幽明眞科』があつて、「七祖立ちどころに九幽長夜の中に開度して、上天堂に昇るを得」と言うから、とりわけ明眞齋は九幽の魂の救済を特徴とするものであつたのであろう。劉無待の『九幽經』はこうした靈寶經の流れを踏まえて作成されたものである。

因みに、杜光庭の『太上黃籙齋儀』の卷五十六「禮燈」の項では、前半で、主に『上元金籙簡文眞仙品』を用いて、「上元金籙簡文眞仙品に曰く、然燈の威儀は、帝王國主の爲に、上天災を銷し、天の分度を正す、下兆庶を安んじ、存亡を濟拔す、當に九幽神燈を然し、上九天の福堂を照し、下九幽の地獄を照し、人天惠を蒙り、生死恩を荷う」と九幽の神燈を燃やす意義などを明らかにしている。そして、後半では、「弟子某乙、九幽神燈を然し、上天福堂の内を照らし、光景を朗徹し、萬方に輝映す、中中宮境域神州を照らし、妖惡潛消し、災凶殄息

す、下 中央普掠の獄を照らし、諸の幽暗を破り、諸の光明を開く、劍樹 鋒を韜み、刀山 刃を息む、窮魂 考を罷め、罪魄 酸を停む、苦を離れて天に生じ、逍遙快樂す、弟子再拜す」などと『九幽經』に説く中央普掠の獄を初めとする九幽地獄に神燈を照らすことによる救濟祈願の言葉が連ねられているのである。

第三章 『九幽經』・九幽地獄・北帝

さて、『九幽經』の看板は、勿論、九幽地獄について説明している部分である。「①亦見東方風雷之獄、常有黑風、震雷霹靂、飛戈飄戟、衝突罪人、分散(解)肢(支)體、穿穴五臟(藏)、萬劫受苦、不捨晝夜。②又見南方火醫之獄、有諸罪人、吞火食炭、爲火所燒、頭面焦燎、頭戴(載)火山、皮膚骨肉、節節生火、萬劫受苦、不捨晝夜。③又見西方金剛之獄、有諸罪人、金槌鐵杖、亂拷無(无)數、肢(支)體爛壞、筋骨零落、鐵叉(杖)穿腹、金槌塞心、萬劫受苦、不捨晝夜。④又見北方溟冷(靈)之獄、有諸罪人、沈沒丘寒之池、氷戟霜刃、衝斷筋骨、百毒之汁、以灌其上、五體

零落、心腹破壞、萬劫受苦、不捨晝夜。⑤又見中央普掠之獄、有諸罪人、身被拷掠、痛毒難忍、斷筋流血、悶絕擲地、於是獄卒、方以鐵叉又刺、令諸罪人、各各巡上山劍樹、八達交風、吹樹低昂、足履(落)刀山、掛身劍鏢、萬劫受苦、不捨晝夜。⑥又見東南方銅柱之獄、有諸罪人、身上銅柱、大火猛焰、令諸罪人、手抱足登(躐)、表裏焦爛、腹背膿潰、萬劫受苦、不捨晝夜。⑦又見西南方屠割之獄、有諸罪人、身被倒(到)懸、刀劍割體、四肢(支)筋脈、皮膚五臟(藏)、皆有刀刃割切、其中罪人、血流滿地、非可堪忍、萬劫受苦、不捨晝夜。⑧又見西北方火車之獄、有諸罪人、五車裂體、四肢(支)分散、或身處火車、東西南北(隨車東西)、一一車輪、皆有刀刃、隨輪運轉、割切罪人、加諸猛火、燒炙焦爛、萬劫受苦、不捨晝夜。⑨又見東北方鑊湯之獄、有諸罪人、身被鐵叉、又入鑊湯、五體煮潰、四肢(支)潰爛(爛潰)、膿血臭穢、不可堪忍、萬劫受苦、不捨晝夜」(第二紙—第三紙。括弧内は敦煌本の異文)と。

さて、『九幽經』が九幽地獄を詳説することは、上述の通りであるが、この『九幽經』の内容の大略については、

吉岡義豐氏は、當初、次のように紹介されていた。⁽⁹⁾

「地獄に墮ちた一人が、地獄極重の苦も受けず、傷害も受けず、悠々としているのを見て、地獄の主である酈都北帝が不思議に思い、元始天尊にその理由をただと、天尊は、この者は曾て九幽大齋を行い、金籙白簡九眞妙戒を受けていることを説明して、そのなぞを解いている」と。

これは非常に示唆に富む全體把握である。

この吉岡氏の見解を踏まえつつ、この經典の特色について考察を加えて行こう。そこで目につく特色の第一は、「九」の文化の問題であり、その中では、九眞妙戒の重視、四司五帝の尊重などが擧げられる。第二は、「發道意」と「無上道」の語の見られることであり、第三は、北帝が登場し、「黑簿」の語がみられることである。

最初に「九」の重視の問題を取り上げる。九の數字は、四プラス五（或いは五プラス四）として現れる場合と單に九で示される場合とがある。

まず、經題にも含まれる「九眞妙戒」が當然、最も重要なものであろう。

ここにおいて元始天尊、復た四衆に告ぐ、汝ら諦聽せよ、靜念 心に在れば、吾當に汝の爲に顯かに九眞妙戒を説かん、金籙白簡、受持の功德、難を抜き苦を濟い、神力思い難し、衆靈稽首し、伏して教命を受く、天尊告げて曰く、一は克勤 君主に忠なり、二は敬讓 父母を孝養す、三は不殺 慈もて衆生を救う、四は不淫 身を正し物を處す、五は不盜 義を推し己を損ず、六は嗔りて凶怒もて人を凌がず、七は詐り諂いて善を賊害せず、八は憍傲もて至眞を忽かにせず、九は不二 戒を奉じること專一にす。(第五紙)

次に、四プラス五（或いは五プラス四）がこの『九幽經』で最初に登場するのが、「四司五帝」である。即ち、經の冒頭では次のように述べる。

爾の時元始天尊、九清妙境三元宮中に在り、三炁華なる寶雲玉座に御し、霧林の下、諸天大聖、太上道君、太上老君、九皇上眞、飛天大聖、妙行真人、四司五帝、天龍神鬼、無鞅數衆と、一時に同じく劫仞寶臺に會す。(第一紙)

この「四司五帝」のうち、「四司」については、「司命」「司録」「司功」「司殺」を指すことが繰り返し説かれる。

五帝考官、察命童子、司命司録司功司殺。(第一紙)

三官九府、百二十曹、五帝考官、九幽地獄、巨天の力士、執領の神兵、司録司命司功司殺、牛頭獄卒、三界の大魔、亡過を拔度す。(第六紙)

四司五帝については、『大獻經疏』にも次のように説く。

明らかになす 天尊 慈もて兆庶を憐む、故に神光を發す、道君 羣生を愍念し、爲に經法を轉じ、具さに天地水官、三官九府、百二十曹、四司五帝、考録諸官に陳ぶ、おのおの三元の晨を以て、上 玄都宮内に詣り、人天の善惡を校定して、生死簿書を分別す、あるところの善功、みな記録を蒙る、云々。(第四紙)

さて、「九」の文化について言えば、『九幽經』は、「九天」「九清」「九皇」「九府」「九壘」「九宮眞人」等、「九」を名數とする概念に満たされていると言つてよい。そして、成玄英の『老子開題』では、「陸先生云う、老子初めて生じ、却行すること九步、因りて即ち能く言う」と述

べ、また、「故に八十一章、太陽の極數に象る」と言う。

八十一は、九×九、即ち大なる陽數九の自乘である。そして、これが何れも老子に關する發言なのである。因みに『大獻經疏』には、次のような記述がある。

苦縣の君子は、即ち是れ老君の應身、玄妙玉女、左腋割きて陳郡苦縣に生む、(中略)東西南北行くこと九步、因りて即ち能く言う、自ら李樹を指して姓と爲す、天上天下、唯我獨尊、即ち九龍 地より湧き出で、水を吐きて沐浴す、出龍の地、便ち九井と爲す、今に至るまで見に在り。(第二十一紙)

これも老子に關する記述であり、老子を熱く信仰する重玄派にふさわしいものである。つまり、『九幽經』は、「九」の文化に執着する重玄派の氣分をよく表した經典であると云える。このことは、「七」の文化を尊重する茅山派と對比を見せよう。¹⁰⁾

次に『九幽經』の末尾近くに見える「發道意」と「無上道」について考察する。

是の時北帝、及び諸の四衆、九幽の罪人、是の説を聞

き已り、心開けて悟解し、おのおの善念を生じ、衆苦消釋し、身心泰然たり、皆 道意を發し、性不退轉、是の時九幽黑簿、一時に焚燼す、(中略)頌曰、無上道に稽首し、元始の尊に歸心す、云々。(第九紙)

孟安排の『道教義樞』では、「道意義」において、(1) 自然道意、(2) 研習道意、(3) 知眞道意、(4) 出離道意、(5) 無上道意の五種道意説を敍べるが、これは、「位業義」に説く五種心、即ち、(1) 發心、(2) 伏道、(3) 知眞、(4) 出離、(5) 無上道の五心と同様の説であり、また、成玄英の『老子義疏』に説く五種心と重なる。成玄英は五種心について次のように説明する。「誓心多端なるも、要は五に過ぎず、一は發心、二は伏心、三は知眞心、四は出離心、五は無上心なり。第一の發心とは、自然道意を發して法門に入るを謂うなり、(中略)第五の無上心とは、直ちに道果に登り、乃ち大羅に至るを謂うなり」(第十七章)。この『道教義樞』や成玄英の『老子義疏』に説く、無上道意や無上心は、『本際經』の説く、無上自然道意と同様の内容を持つものであり、また、『道教義樞』や『老

子義疏』の五種道意説、五種心の説は、『本際經』の道意説を踏まえて展開されたものである。『九幽經』の「發道意」と「無上道」の思想は、この重玄派道教の系譜に連なるものである。

次に「北帝」と「黑簿」について考察する。まず、『九幽經』の末尾近くの記述を再録する。

是の時北帝、及び諸の四衆、九幽の罪人、是の説を聞き已り、心開けて悟解し、おのおの善念を生じ、衆苦消釋し、身心泰然たり、皆 道意を發し、性不退轉、是の時九幽黑簿、一時に焚燼す。(第九紙)

このうち、「黑簿」は、また「惡簿」と呼ばれる。即ち、「爾の時 普掠獄中、諸の罪人あり、名 黑簿に入る」(第二紙)「遂に名をして惡簿に書し、身をして九幽に没せしむ」(第五紙)「若し人 命過ぎれば、應に九幽に入りて、名 黑簿に書すべし」(第八紙)「名 惡簿に書し、身 鬼官に没す」(第八紙)「夫妻男女、門人同學、當に亡人の爲に、九幽大齋を立て、名を白簡に書すべし、九眞妙戒を受くが爲に、黑簿を燒除す、彼の諸の罪人、時に應じて解脱

し、魂 九天に上るべし、因縁輪轉して、九宮真人と爲るを得」(第八紙)とあるのなどがそれである。

このように見てくると、『九幽經』はこの死者の名簿である「黒簿」「惡簿」に記載されることが、九幽地獄に轉落することであり、九幽大齋を立て、また、九眞妙戒を受け、更には「道意」を發することが、この「黒簿」を燒盡させるとする經典であるとも言えよう。

そして、北帝については次のように様々に描寫する。

〔救苦天尊〕北帝に敕命し三官九府百二十曹、五帝考官、察命童子、司命司録司功司殺(中略)みな九幽地獄の中に集まり同じく教戒を稟く。(第一紙)「爾の時 酆都北帝及び諸の鬼官、みなみな震悚して、おのおの是の念を作す。

(第二紙)「爾の時 九幽地獄の衆生、是の北帝の廣く啓語を爲すを聞き、心 悔過を生じ、拔罪を願ひ求む、聲を擧げて悲叫し、響 梵天に振る。(第四紙)「是の時 北帝、心大いに驚怖し、稽首禮謝して、上 天尊に白す。(第二紙)「爾の時 北帝、是の説を聞き已り、心大いに歡喜し、踴躍に勝えず、尊顔を瞻仰して、頌を作して曰く、善

いかな元始の尊、衆生の慈父母、光を紫微宮に傾け、曲さに九幽の戸に映ず、云々(第五紙)「爾の時 北帝、是の頌を聞き已り、諸天の大衆、聲を同じうして善を稱し、鈞天の伎樂、萬種互いに作り、幢蓋香花、一切を塵覆す(第五紙)」と。

『九幽經』では、北帝は酆都の鬼官を統率する立場であるが、また、元始天尊を奉じて九幽地獄の衆生を救濟し、更に、最後は衆生とともに道意を發して、無上道を究める慈悲深い存在として描かれている。

ところで、氣鋭の酒井規史氏は、『太上元始天尊說北帝伏魔神呪妙經』卷六に、『太上九眞妙戒金籙度命拔罪妙經』が組み込まれていることを指摘され、酒井氏の所謂『拔罪妙經』に敦煌本(スタイン九五七號)、道藏本、道藏輯要本、太上元始天尊說北帝伏魔神呪妙經・卷六の四つのテキストがあることを述べられる。酒井氏の主張されるところは、『拔罪妙經』が『九幽經』ではないとすることである。⁽¹¹⁾

しかしながら、既に取り上げたように敦煌本は、『太上九眞妙戒金籙度命九幽拔罪妙經』なる首題であって、他の

諸本のように「九幽」を脱してはいないのである。そこで翻つて考えると、『太上九眞妙戒金籙度命九幽拔罪妙經』は、北帝信仰をメインとする『太上元始天尊說北帝伏魔神呪妙經』の卷六に組み込まれるに當つて、本来の經典の主旨を表す「九幽」の語が經題から消滅させられ、それが現行本の道藏や道藏輯要の經題にも反映しているのではなからうか。

勿論、『九幽經』が北帝信仰をメインとする『太上元始天尊說北帝伏魔神呪妙經』の卷六に組み込まれることになつたのは、そこに唐代道教において出色の北帝像が描かれていることに起因すると思われるのである。

第四章 『九幽經』と『太上慈悲道場』

消災九幽懺

ここでは、茅山派の第十三代の宗師である李含光（六八三—七六九）の序が付される『太上慈悲道場消災九幽懺』十卷について考察する。この著作の成立年代について吉岡氏は次のように指摘している。「李含光の序文であるが、

これを認めることになると、道教の九幽懺十卷は大約唐玄宗の末年頃（七五六頃……筆者）には出生していた、ということになる。この李含光の序文を強いて否定する根據はなさそうである」と。妥當な見解であろう。

『太上慈悲道場消災九幽懺』には、「太上老君說報父母恩重經」を引用するが、この經の中には「海空智藏」なる神格が登場し、また、『太上靈寶洪福滅罪像名經』を引用するが、この經の中にも『太上一乘海空經』に信禮す⁽¹³⁾とも言っている。これらは重玄派の『海空經』の影響下にある經典である。そして『太上慈悲道場消災九幽懺』には、しばしば「海空智藏真人」の語が登場するから、この懺法は、茅山派が重玄派道教の教義を攝取した著作と見られる。

このことは、また、『太上慈悲道場消災九幽懺』の卷一の「敘問懺悔品第五」には、「太上 是の懺法を説き、衆生を得度せしむ、云々」として、次の偈を連ねることからも窺われる。

善哉元始尊、三界所共崇、聖力不思議、智德無等雙、自然七寶座、踊現鸞林中、具足有形相、無礙猶虛空、

將示重玄義、開發衆妙門、了出無上道、運轉大乘轅、
善巧說諸法、群生普得蘇、我等聞是法、肅然心垢除、
不勝情忻悅、稽首禮玉虛。

この偈は重玄派の『太玄眞一本際經』卷一のよく知られて
いる最初の偈である。『太上慈悲道場消災九幽懺』の引用
には、多少の出入もあるので、次に『太玄眞一本際經』卷
一のものを掲げる。

善哉元始尊、三界所共宗、神力不思議、智德無等雙、
自然七寶座、踊現鸞林中、具足有形相、無礙猶虛空、
將示重玄義、開發衆妙門、了出無上道、運轉大乘轅、
善巧說諸法、不有亦不無、空假無異相、權實固同途、
道場與煩惱、究竟並無餘、我等聞是法、蕭然心垢除、
不勝情忻悅、稽首禮玉虛。(敦煌本ベリオ文書三三七一及
び三三九二)

そして、『太上慈悲道場消災九幽懺』卷八の「懺九幽品
第三」の冒頭では、「今日道場大衆人、各運心仰對慈尊、
懺悔九幽地獄罪苦、懺主某攝心長跪、諦聽經言、九幽者東
北方朔陰之地、九壘之下、名曰九幽地獄、其獄深沈繫閉」

と述べ、次に以下のように九幽地獄を連ねる。「①東有風
雷地獄、常有黑風、震雷霹靂、飛戈飄戟、衝突罪人、分解
肢體、萬劫受苦、不捨晝夜。②南有火鑿地獄、有諸罪人、
吞火食炭、爲火所燒、頭面焦爛、頭戴火山、皮膚骨肉、節
節生火、萬劫受苦、不捨晝夜。③西有金剛地獄、有諸罪
人、金槌鐵杖、亂攷〔拷〕無數、肢體爛壞、筋骨零落、鐵
叉穿腹、金槌塞心、萬劫受苦、不捨晝夜。④北有溟冷地
獄、有諸罪人、沈沒丘寒之池、氷戟霜刃、衝斷筋骨、百毒
之汁、以灌其上、五體零落、心腹破壞、萬劫受苦、不捨晝
夜。⑤中有普掠地獄、有諸罪人、身被攷〔拷〕掠、痛毒難
忍、斷筋流血、悶絕擲地、於是獄卒方以鐵叉叉刺、令諸罪
人、各各巡上刀山劍樹、八達交風、吹樹低昂、足履刀山、
掛身劍鏢、萬劫受苦、不捨晝夜。⑥東南有銅柱地獄、大火
猛焰、有諸罪人、手抱足登、表裏焦爛、腹背膿潰、萬劫受
苦、不捨晝夜。⑦西南有屠割地獄、有諸罪人、身被倒懸、
刀劍割體、四肢筋脈、皮膚五臟、皆有刀刃、割切其身、血
流滿地、不可堪忍、萬劫受苦、不捨晝夜。⑧西北有火車地
獄、有諸罪人、五車裂體、四肢分散、或身處其中、隨車東

西、一切輪轉、皆有鋒刃、隨輪運轉、割切罪人、加諸猛火、燒令焦爛、萬劫受苦、不捨晝夜。⑨東北有鑊湯地獄、有諸罪人、身被鐵叉、又入鑊湯、五體煎煮、四肢爛潰、膿血臭穢、不可堪忍、萬劫受苦、不捨晝夜」と。これが『九幽經』の敘述を襲っていることは明白であろう。

ところが、前述の酒井氏は、『太上慈悲道場消災九幽懺』に引用される經典は、「すくなくとも七世紀後半から八世紀のごく初期までに作られていたものとみてよさそうである」としながらも、上記の「懺九幽品第三」の引用について、「この九幽地獄の説も、何らかの經典（以下、『懺九幽品第三』の原典、と稱す。）から引用されていると考えられるが、出典は不明である。」とされる。⁽¹⁴⁾

しかし、酒井氏の態度は甚だ面妖で、これは、『九幽經』からの引用であると認めるべきであろう。思うに『太上慈悲道場消災九幽懺』は、『本際經』の場合と同じく、劉無待の『九幽經』を經名を明らかにしないで引用しているのである。このことは、盛唐時代に九幽地獄について語る最も有力な經典が『九幽拔罪經』、即ち『九幽經』であっ

たことをよく示しているのである。

次に『太上慈悲道場消災九幽懺』の李含光の序について考察する。序では『太上慈悲道場消災九幽懺』の由來について次のように述べる。

太上慈悲道場消災九幽懺は、太極左仙公葛玄より始まり、(中略)〈葛玄〉自ら謂う大乘奧旨、以て衆生を開導し、沈溺を拯濟すべしと、遂に三洞の品内に、その樞要を撮り、懺文を纂集して、當世の群生をして、悉く聞き悉く見、將來の多士をして、悟り易く行い易からしむ、無聞酈都・阿鼻寒夜・三途五苦・八難九幽の沈滞せる苦魂に至りては、幽閉に遇わざらしめ、乃ち見存過去未來、犯すところの新罪宿愆、冤結災難におよびては、普ねく法潤を得て、俱に正眞に會わしむ。

ここでは、衆生を「無聞酈都、阿鼻寒夜、三途五苦、八難九幽」から救済することが懺文纂集の目的であるとしていて、それは明快なのであるが、注目すべきは、序の冒頭の記述である。

かの赤明始めて開くを原ぬるに、雲象 肇めて霄極に

形われ、炎漢後に啓け、靈文漸く人間に布く、西蜀なれば則ち金闕の遺科、東吳なれば則ち太極の傳教、これより大有の祕笈、洞眞の瓊章、張徐これを前に顯わし、陶陸これを後に敷く、師資繼踵して、代々 其の人を生ぜり。

ここに言う「陶陸」とは靈寶經典の傳授に功績のあった三洞説の創唱者である劉宋の陸修靜と茅山派の大成者である梁の陶弘景であり、魏晉南北朝時代の道教史では對立的な存在であったと見られる道士達である。ところがここで李含光は實にあつざりと兩者を「師資」の關係にあつたとしてしまっているのである。後に書かれた李渤の「眞系」(『雲笈七籤』卷五)において「陶陸」の兩者は茅山派の系譜に組み込まれてしまっているが、その説の淵源は、茅山派中興の祖とされる李含光の仕掛けに由来すると考へるのである。そして、李含光はそれと同時に陸修靜を信奉していた道教重玄派の劉無待の『九幽經』なども『太上慈悲道場消災九幽懺』の中に包攝したのである。

さて、宋代までの『九幽經』の流傳については第一章で

述べたので、以下には、元から現代までの『九幽經』に纏わる事柄について述べておこう。元初の成立とされる『靈寶領教濟度金書』卷三十四の「九幽燈儀」では、「幽冥、幽陰、幽夜、幽野、幽都、幽治(治)、幽關、幽府、幽獄」の「九幽」地獄と『九幽經』の九幽地獄の二つのカテゴリの九幽地獄を連ねる。しかし、「九幽燈儀」の他の箇所では、例えば、「下 東方風雷地獄を照らし、飛戈 刃を停め、震雷 威を輶む」と『九幽經』の「震雷霹靂、飛戈飄戟」を踏まえた表現が展開されており、また、『靈寶領教濟度金書』卷二九七の「九天尊表」には、太乙救苦天尊、九幽拔罪天尊、逍遙快樂天尊、大鍊丹界天尊、朱陵度命天尊、無量度人天尊、長生護命天尊、轉輪聖王天尊、寶華圓滿天尊など所謂「九天尊」が列せられていることは記憶しておいてよいであろう。

また、『藏外道書』には、ラストエンペラーの宣統元年(一九〇九)の紀年のある雲峯羽客陳仲遠の校輯という『廣成儀制九幽正朝全集』が収録されている。版は酆都地獄に縁のある四川の成都にあつたとされる二仙庵の藏板であ

る。そして、その中では冒頭に「仰翁長庚井 練胎反嬰孩
太一保命籍 南陵拔夜居」と述べた後、「九幽拔罪天尊」
の名が掲げられ、次の頌が綴られる。「道自真機一貫元、
道中玄妙玄更玄、經文義向赤書啓、經旨還從太古傳、師教
流通開至理、師恩浩蕩徧三千、寶壇碧玉琉璃地、寶黍乾坤
坤合乾」と。これも「九幽拔罪天尊」信仰の一端を示す經
典であろう。

現在の臺灣に目を轉じると、大淵忍爾氏が『中國人の宗
教儀禮』の中で、臺灣の道教儀禮を述べるうちに『九幽拔
罪寶懺』十卷に關する儀禮について觸れられていることが
注目される。そこでは大淵氏は最初に「九幽寶懺十卷の讀
法は三元寶懺や冥王寶懺の場合と同じ」と述べ、その「念」
の「爾時 元始天尊 時遊十方世界、天上地下無所不經
云々」に關して「以下の本文の部分は道藏第三〇〇冊、太
上慈悲九幽拔罪懺卷之一の本文と、天尊名に異同があり、
文字に小異のある外、同文につき掲載は省畧。卷二以下も
同じ」と述べる。

ところで、道藏に収録される當面の『太上慈悲九幽拔罪

懺』は、その經題から見ても『九幽經』を意識した著作と
見られるが、果たしてその卷八には十二の道教經典を並べ
る中に、『九幽經』の名が登場するのである。

或いは曾て上清經・靈寶經・正一經・道德經・西昇
經・黃庭經・內觀經・太平經・消災經・報恩經・九幽
經・救苦經・及び諸經戒を讀む。

そして、『太上慈悲九幽拔罪懺』は、これらの經名を掲
げた後、これらの經典をおろそかにした罪について述べ、
「汝ら男女、各自 心を省み、勤めて至眞を奉じ、當に後
果を求むべし、經懺に請禮して、福田に入らしめよ、已に
亡ぶ者は早に天に生じるを得、未だ終らざる者はみな安樂
を希り、諦めて聽き諦めて受け、法に依りて修行し、道の
前に懺悔し、志心もて敬禮せよ」と懺悔の功德を説くので
ある。

翻って、先の臺灣の九幽拔罪寶懺に關する儀禮について
全體の説明が終わったところで大淵氏が「九幽は澤田教授
指摘の通り、『地獄變』二〇頁〇、もと八方と中央の九つの地
獄を指していた。早くスタイン將來敦煌文獻第九五七號、

金籙度命九幽拔罪妙經（道藏第七七冊、太上九眞妙戒金籙度命拔罪妙經）には見える」（前掲者）と指摘されているのも、現代臺灣の儀禮が遠く唐代の『九幽經』に來源していることに言及されたものであろう。

結 語

新世紀になって、中國では王宗昱氏の『道教義樞』研究⁽¹⁾や陳鼓應氏主編『道家文化研究』第十九輯―「玄學與重玄學」專號―が出版されて、重玄派道教研究も新たな發展を見せているようである。ところが、日本では、隋唐時代の茅山派や重玄派の存在を否定して、正一派だけが存在したとする不可解な見方が出されている。⁽¹⁶⁾

道教重玄派は、唐代の都、長安を中心に重玄の新思潮を展開したスター道士の集團だった。筆者は別稿において盛唐の詩人杜甫がその作品を著すに當たって重玄派道教の代表的經典である『太玄眞一本際經』を踏まえていることを指摘したが、⁽¹⁷⁾小論では、重玄派道教研究の一環として『九幽經』の考察を行い、合わせて現代までの影響について略

説した。今後は前著の重玄派道教に関する研究を更に深めて行くことを表明して擲筆する。

註

- (1) 澤田瑞穂『地獄變』（増訂版）平河出版社一九九〇年刊。
なお、本論文の引用は原則として書き下しとしたが、對照を事とする場合や全文を掲載したい場合などは、紙數の關係で原文のままとしたところがある。諒解されたい。
- (2) 吉岡義豊『道教と佛教』第一（國書刊行會一九八〇年刊）
「施餓鬼思想の中國的受容」參照。
- (3) 吉岡義豊『道教と佛教』第二（豐島書房一九七〇年刊）「中元孟蘭盆の道教的考察」參照。
- (4) 拙著『隋唐道教思想史研究』平河出版社一九九〇年刊參照。
- (5) 『道家文化研究』第一九輯、生活・讀書・新知三聯書店二〇〇二年刊所收。
- (6) 劉宋の求那跋陀羅譯。大正新修大藏經第十七卷所收。
- (7) 王宗昱『道教義樞研究』上海文化出版社二〇〇一年刊參照。
- (8) 神塚淑子『六朝道教思想の研究』創文社一九九九年刊參照。
- (9) 吉岡氏註(2)論文參照。

- (10) 拙稿「仙女と仙媛」(『宮澤正順博士古稀記念東洋比較文化論集』青史出版二〇〇四年刊所收) 参照。
- (11) 酒井規史「唐代における北帝信仰の新展開―『拔罪妙經』を中心に―」(『早稲田大學大學院文學研究科紀要』第四十九輯・第一分冊二〇〇四年刊所收) 参照。
- (12) 吉岡氏註(2)論文参照。
- (13) 『太上靈寶洪福滅罪像名經』には、「重玄妙勝天尊」「太妙重玄天尊」等、天尊名に「重玄」の語を含む例が多く見られる。又、酒井氏註(11)論文参照。
- (14) 酒井氏註(11)論文参照。
- (15) 松本浩一「道教と宗教儀禮」(『道教』1平河出版社一九八三年刊)所收参照。また、小南一郎「九幽」(『道教事典』平河出版社一九九四年刊)も参考にした。
- (16) 小林正美『唐代の道教と天師道』知泉書館二〇〇三年刊。
- (17) 拙稿「太清・太一と桃源・王母―杜甫と道教に關する俯瞰―」(『福井文雅博士古稀記念論集 アジア文化の思想と儀禮』二〇〇五年刊行豫定所收) 参照。